



## 村上三郎 - 70年代を中心に - Saburo Murakami: Focus on the 70s



村上三郎(1925-1996)は、50年代中盤より《具体美術協会》の中核メンバーとして、従来の美術表現における諸形式を批判的に逸脱し、その枠組みを押し抜け、新たな芸術の様態を生み出すという前衛的姿勢に精力を傾けると同時に、自己と外界の関わり、作品を生み出すということ、そして作品と他者との関係性について、常に独自の問題意識を追究しながら自身の表現を展開しました。

よく知られる『紙破り』のパフォーマンスや『投球絵画』から、50年代後半～60年代に生み出された数々のペインティング、《具体》解散後の70年代以降に見られるミニマルな手法に基づいた概念芸術を思わせる一連の表現まで、多岐にわたるその作品世界はひとつの解釈では捉えきれない謎めいた様相を呈す一方で、一貫した哲学や一定の方法論に裏打ちされているような透徹した印象をも与えます。特に、70年代に開催された一連の個展は、展示全体を貫くひとつの命題が見受けられる、あるいは、展覧会そのものをひとつの作品と捉えることができるなど、そのそれぞれに、作家の抱く問題意識がより明瞭な形として現れていたことを感じさせます。

本展では、71年から77年に行われた7回の個展\*に焦点をあて、作家直筆のメモやノート、当時の写真、そして、展覧会前あるいは会期中にある一定のルールに基づいて創出された作品やオブジェクトなどにより、展覧会ごとの内容、および同時期の制作の軌跡を多角的に提示することで、《具体》時代の活動に比べて、これまで注目される機会の少なかった70年代における村上三郎の表現活動を重点的に振り返ります。また、この度新たに修復を終えた50年代前半から最後期に至るまでの10点余りのペインティング、《具体》時代初期の『紙破り』の記録映像や、80年代後半以降のパフォーマンス及びインタビューを再編集した映像を、上記70年代の作品・資料と並列させることで、本展が、半世紀に及ぶ活動の中で作家が追究した存在や認識、創造についての問題、そして、多様に展開・変貌を遂げてきたその表現に通底する方法論について再考・再検証するための起点の場となることを目指します。

\*3ページ目：作家略年譜の★印参照

上：個展(通称：拍子木)(1973年5月21日～6月1日/春秋館画廊、大阪)にて、画廊の階段の途中に置かれた拍子木(撮影：夏谷英雄)  
下：作家による同展のための作品リスト

### 【展覧会概要】

観覧先：村上三郎 - 70年代を中心に - / Saburo Murakami: Focus on the 70s

会期：2011年11月12日(土)～12月17日(土) \*日・月・祝 休廊 / 開廊時間：11:00～19:00 (土曜日 17:00)

会場：アートコートギャラリー [〒530-0042 大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F]

### 【関連イベント】

▶トークイベント：11月25日(金) 18:00～19:00 | 今井祝雄(作家) × 藤本由紀夫(作家)、進行：池上司(西宮市大谷記念美術館 学芸員)

▶レセプション： // 19:00～

### 【DVD出版のお知らせ】

本展の開催にあたり、村上三郎が'86年以降に国内外の各地で行った〔紙破り〕を始めとするパフォーマンスの映像および、95年に行われたインタビュー映像を収録したDVD+冊子のパッケージが出版されます。

■ 撮影：村上牧子 他 / 編集：藤本由紀夫 / 発行：Flip books

■ Ed.3. '93年の〔紙破り〕のパフォーマンス『入口、音』(ジーバックホワイト、神戸)に用いられた金泥塗りのハトロン紙が、冊子の表紙に使用されます。価格未定。 左：『入口』『具体展』1992年 芦屋市立美術館より ※参考画像



主催：アートコートギャラリー(有限会社八木アートマネジメント)

協賛：三菱地所株式会社、三菱マテリアル株式会社、三菱地所プロパティマネジメント株式会社

【お問い合わせ】アートコートギャラリー [八木・清澤] ※ビジュアル資料ご希望の方は、お気軽にお問合せ下さい。

〒530-0042 大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F TEL:06-6354-5444 FAX:06-6354-5449

E-mail:info@artcourtgallery.com URL:www.artcourtgallery.com



## ARTCOURT Gallery

Yagi Art Management, Inc.

OAP ARTCOURT 1F 1-8-5 Tenmabashi Kita-ku Osaka 5300042 JAPAN

### 【展示趣旨・概要】

自身と対象との関わり合いから生まれる偶然を必然として受け止め、作品に定着させること。思考によって切り離された時間と空間を、身体的な行為の場において再度結合させること。中身のない状態＝空虚を用意することによって、背後に概念的な理由や意味を求めめるのではなく、ただ目の前の現象＝「今、此处」をあますところなく見据え・享受すること――。

何重ものハترون紙を全身で突き破る際、激しい運動と鋭い音が渾然一体となってひとつの磁場を生み出す『紙破り』や、何かを内包する容器ではなく、その都度ただそれだけの存在として提示される数々の「箱」にも表れているように、村上三郎の表現や言葉のひとつひとつに向き合うとき、その端々には、こうしたいくつかの問題意識を見てとることができます。

〈具体美術協会〉解散後の70年代に、村上はひとりの表現者として、複数回に渡り個展を開催しました。いくつかの木箱を街のあらゆる場所に出現させた後、回収・解体する<sup>1</sup>、観客が鳴らす拍子木の音に聞き入る<sup>2</sup>、展覧会会場でひたすら無言を貫く<sup>3</sup>、ボウルに入った水を別のボウルへ移す行為を繰り返す<sup>4</sup>など、個展の度ごとに、いわゆる「作品」や「展覧会」についての従来の概念は鮮やかに切り崩され、そこには、シンプルな行為が何気ない日常や事物を新鮮な驚きと無限の創造性へと導くことへの気づきに満ちた、軽妙かつ刺激的な「交渉の場」が出現しました。

それら一連の個展は、展示全体を貫くひとつの命題が見受けられる、あるいは、展覧会そのものをひとつの作品として捉えることができるなど、そのそれぞれに、作家の抱く「時間」と「空間」、「必然」と「偶然」、そして「今、此处」についての意識がより洗練された形で息づき、その現象と経験を鑑賞者＝他者と共有しようとする意図が一層明瞭になっていることを感じさせると同時に、物事の捉え方についての村上自身のより深化した目線や、認識についてのさらなる問いかけが暗号のごとく散りばめられているかのようでもあります。

そのような場の創出に際して作家が思案を重ねたノートや、閃きを書きつけた紙片、そこから生まれた対話や行為の集積・痕跡、同時期に作品として制作されたオブジェクト、当時の様子を記録した写真の数々を、この度新たに整理・分類し、それらを繋ぎ合わせることで、ひとつひとつの個展の内容を振り返り、再検証します。ここでは、『箱』展に用いられた箱の配置／回収表や、〔無言〕展の会期中に作家と来場者が交わした筆談のメモ帳などを始めとする20点余りの資料や作品によって、作家の行為や思考の軌跡をたどることが可能になり、また、あまり知られていない〔拍子木〕展や『自同律の不快』展<sup>5</sup>の全貌の再構成などが試みられます。さらには、そこに至るまでの50～60年代における〔紙破り〕の映像、各時期のペインティング、80年代後半以降のパフォーマンスの記録映像を併せ、半世紀に及ぶ村上三郎の表現の展開を、ひと続きの流れとして提示します。

### 【注釈】

1. 1971年 村上三郎『箱』個展、モリスフォーム(大阪)
2. 1973年 村上三郎 個展(拍子木)、春秋館画廊(大阪)
3. 1973年 村上三郎展(無言)、無減社(大阪)
4. 1974年 村上三郎展(水)、信濃橋画廊エプロン(大阪)
5. 1977年 村上三郎展『自同律の不快』、ギャラリーキタノサーカス(神戸)

※文中、注釈中の( )内はすべて通称。

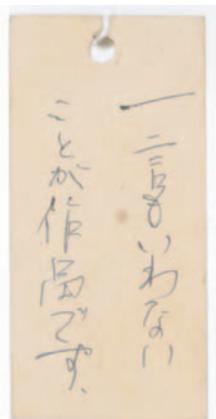
### 【参考イメージ】



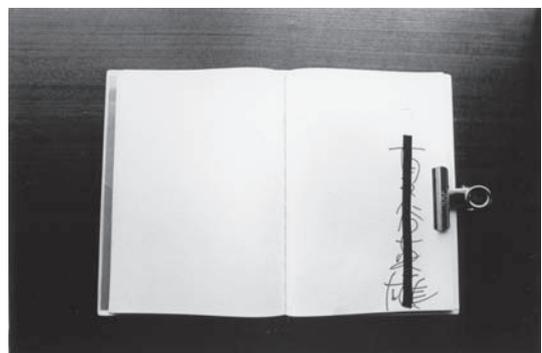
大阪の街中に置かれた木箱(71年『箱』より)  
撮影:夏谷英雄



『作品』1963年  
212 x 138 cm  
VB塗料,石膏,ポンド綿布,パネル



'73年の個展(無言)において  
会場で作家が来場者に手渡し  
していた紙片。



来場者が芳名帳に記入した途端、作家がその目の前で書き込まれた名前を削除するパフォーマンス。(77年『自同律の不快』より)  
撮影:夏谷英雄

【お問い合わせ】アートコートギャラリー [八木・清澤] ※ビジュアル資料ご希望の方は、お気軽にお問合せ下さい。

〒530-0042 大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F TEL:06-6354-5444 FAX:06-6354-5449

E-mail:info@artcourtgallery.com URL:www.artcourtgallery.com

## 村上三郎 略年譜

- 1925 (大正 14) 神戸市に生まれる。[6月27日]
- 1943 (昭和 18) 関西学院大学予科に入学。絵画部「弦月会」に入る。[4月]  
神原浩に師事、油絵を始める。[6月]
- 1948 (昭和 23) 関西学院大学文学部哲学科を卒業。[10月]
- 1949 (昭和 24) 第13回新制作派展(東京都美術館)[9月]  
伊藤継郎に師事。[10月]
- 1951 (昭和 26) 関西学院大学大学院で美学を専攻。[5月]
- 1952 (昭和 27) 第5回芦屋市展(仏教会館、芦屋)'94年の第47回まで毎回参加する。[6月]  
新制作派協会における先鋭分子によるグループ「<sup>0</sup>会」の設立に際し、金山明、白髪一雄、田中敦子らとともに参加。
- 1953 (昭和 28) 村上彦 白髪一雄二人展(阪急百貨店洋画廊、大阪)[7月]  
―― 会場で吉原治良と初めて出会う。\*「村上彦」は当時使用していたペンネーム。
- 1954 (昭和 29) 「<sup>0</sup>会展」(そごう百貨店ショーウィンドー、大阪)
- 1955 (昭和 30) 具体美術協会会員となる。1970年までの具体の全展覧会に出品する。  
真夏の太陽にいどむモダンアート野外実験展(芦屋公園)[7月]  
―― アスファルト・ルーフィングを破りながら走り抜けた作品 他。  
第1回具体美術展(小原会館、東京)[10月]  
―― 『6ツの穴』『入口』などの〔紙破り〕のパフォーマンスを初めて行う。  
この頃より、伊丹、西宮、大阪などの各幼稚園で児童画教育に終生携わる。
- 1956 (昭和 31) 第6回関西総合美術展覧会(大阪市立美術館)[4月]  
―― 洋画の部の委嘱出品に応じて木箱『作品(坐って下さい)』を出品し、物議を醸す。  
野外具体美術展(芦屋公園)[7月]  
―― 周囲の風景を切り取る装置としての『空』『あらゆる風景』を発表。  
第2回具体美術展(小原会館、東京)[10月]―― 『通過』〔紙破り〕を行う。
- 1957 (昭和 32) 第3回具体美術展(京都市美術館)[4月]  
―― 会期中、剥落し続ける500号以上の大作の絵画を出品。  
舞台を使用する具体美術(産経会館、大阪/産経ホール、東京)[5月]  
―― 『屏風と取り組む』〔紙破り〕
- 1958 (昭和 33) この頃より60年代にかけて、ペインティング作品を中心に制作する。  
The Gutai Group Exhibition (第6回具体美術展)  
(Martha Jackson Gallery, N.Y. ほか4都市を巡回)[9月]
- 1960 (昭和 35) International Center of Aesthetic Research, Torino (国際美学研究所, トリノ)  
日本代表委員に就任。[4月]
- 1962 (昭和 37) グタイピナコテカ開館記念展(グタイピナコテカ、大阪)[9月]  
―― 『入口』〔紙破り〕吉原治良による制作。
- 1963 (昭和 38) 個展(グタイピナコテカ、大阪)[4月]  
現代絵画の動向展(国立近代美術館京都分館)[7月]
- 1966 (昭和 41) Gruppe Gutai (Kölnischer Kunstverein, ケルン)[2月]
- 1970 (昭和 45) 動く美術と光の広場(万博お祭り広場、大阪)[3月]  
―― スポットライトがあたるとひとりで倒れる箱を発表。(中に人が入り、体当たりで箱を倒す)
- 1971 (昭和 46) 村上三郎「箱」個展(モリスフォーム、大阪)[4月1~15日]★  
この頃、具体美術協会に対して退会届を提出するが、受理されなかった。
- 1972 (昭和 47) 具体美術協会解散[3月31日]
- 1973 (昭和 48) 村上三郎個展(拍子木)(春秋館画廊、大阪)[5月21日~6月2日]★  
村上三郎展(無言)(無減社、大阪)[10月1~6日]★
- 1974 (昭和 49) 村上三郎展(水)(信濃橋画廊エプロン、大阪)[2月18~23日]★  
村上三郎展(筋)(信濃橋画廊エプロン、大阪)[7月29日~8月3日]★
- 1975 (昭和 50) 村上三郎カキクケ個展(清和画廊、大阪)[3月20~30日]★  
この頃、アーティストユニオンに参加。
- 1976 (昭和 51) 村上三郎展(床)(信濃橋画廊、大阪)[5月17~22日]  
具体美術の18年(大阪府民ギャラリー)[11月]
- 1977 (昭和 52) 村上三郎展「自同律の不快」(ギャルリーキタノサーカス、神戸)[6月4~18日]★
- 1979 (昭和 54) 吉原治良と具体のその後(兵庫県立近代美術館)[1月]
- 1981 (昭和 56) 現代美術の動向1・1950年代 - その暗黒と光芒(東京都美術館)[9月]
- 1983 (昭和 58) 具体AU6人展(Atelierhaus Hildebrandstraße, デュッセルドルフ)
- 1985 (昭和 60) 再構成:日本の前衛1945~1965(オックスフォード近代美術館ほか、イギリス)[12月]
- 1986 (昭和 61) 具体一行為と絵画(兵庫県立近代美術館)[8月]  
前衛芸術の日本1910~1970(ポンピドゥー・センター、パリ)[12月]
- 1988 (昭和 63) 足穂と三ちゃん(アートスペース、西宮)[3月]  
―― 嶋本昭三の企画。村上三郎が傾倒していた文学者、稲垣足穂に捧げられた展覧会。  
藤本由紀夫も参加。
- 1990 (平成 2) 前衛の日本ー1950年代の具体グループ(ローマ国立近代美術館)[12月]
- 1991 (平成 3) 具体・日本の前衛1954-1965(ダルトムシュタット市立マチルデンヘーエ美術館、ドイツ)[3月]
- 1992 (平成 4) 具体展I(芦屋市立美術博物館)[6月]  
甦る野外展(芦屋公園)「具体展I」の関連企画。[7月]
- 1993 (平成 5) 具体展II(芦屋市立美術博物館)[1月]  
第45回ヴェネツィア・ビエンナーレ「東洋への道」[6月]  
具体、其の後(トゥルーズ国立美術学校ホール)  
MUSIC / every sound includes music(ジーベックホワイエ、神戸)[12月]
- 1994 (平成 6) 戦後日本の前衛美術 - 空へ叫び(グッゲンハイム美術館ソーホー、ニューヨークほか)[9月]  
限界を越えて(ポンピドゥー・センター、パリ)[11月]  
―― 出品作品『通過』が同館のコレクションとなる。  
ONE DAY MUSEUM~観るから感じる(川西市役所)[11月]  
―― 『出口』が最後の〔紙破り〕のパフォーマンスとなる。
- 1995 (平成 7) 戦後文化の軌跡1945-1995(目黒区美術館、広島市現代美術館、  
兵庫県立近代美術館、福岡県立美術館)[4月]
- 1996 (平成 8) 脳挫傷のため逝去。享年70歳。[1月11日]  
村上三郎展(芦屋市立美術博物館)[4月6日~5月12日]